落語の舞台、下町浅草を歩く

前東京都台東区立松葉小学校校長
成家亘宏

江戸時代から伝わる庶民の文化の一つに「落語」がある。今回はその舞台を浅草に求めてぶらっと歩いてみた。まずは「近代落語の祖」が眠る谷中、「全生庵」からスタートする。

谷中・全生庵

地下鉄千代田線千駄木駅で降り、団子坂下交差点から東に延びる「さんさき坂」を四百メートルほど上ると、左側に名刹らしい趣のある門構えの寺がある。全生庵である。落語を語るときに、忘れてはならない人物といえば、近代落語の祖「三遊亭圓朝」であろう。なぜなら、落語を文芸的鑑賞に堪えうる芸術作品に高めた人物だからである。人情噺や芝居噺を多く創作し、それを自らの優れた話芸で実際の高座に演出した。

力量のある門弟を多く育て、明治三十三（一九〇一）年に没し、この全生庵に葬られている。代表作には「怪談牡丹燈籠」「真景累ケ淵」「塩原多助一代記」などがある。現在もなお、毎年の忌日に「圓朝まつり」が開かれている。

この「三遊亭圓朝翁碑」は明治三十九（一九〇七）年の圓朝七回忌に建てられたもの。書は、生前愛顧を受けていた明治の元老井上馨侯爵による。

本法寺・はなし塚

谷中から上野を経て、「浅草通り」にさしかかると右側に仏壇屋が並ぶ、俗にいう「仏壇通り」である。東本願寺の前の西浅草一丁目交差点を右に入るとすぐ左側に「長瀧山本法寺」がある。

まず、目を見張るのは、この寺の塀一面に、浅草に由緒ある寄席や落語家、江戸芸人などの名前がずらりとブロックに朱色で彫られていることである。門を入って右手の木立の中に「はなし塚」がある。この塚が建立された昭和十六（一九四一）年当時は、我が国は戦時下にあり、政府の指示もあって、落語界では演題を甲乙丙丁の四種に分類し、丁種は、時局に合わないものとして花柳界、酒、妾に関する噺、郭噺など五十三種を選び、禁演落語とした。

この「はなし塚」は、当時の落語協会などがこれら名作を惜しむとともに、落語界先輩の霊を弔うためのものである。なお、戦後の昭和二十一（一九四六）年九月、「塚」の前で禁演落語復活祭が行われた。

浅草雷門・浅草寺

本法寺から仏壇通りを左へ曲がり田原町を通り、約六百メートル歩くと雷門（正式には風神雷神門）がある。落語に出てくる神社仏閣の中で最も登場回数が多いのが、雷門から仲見世、浅草寺と続くこの一帯である。ちょっとあげてみても「付き馬」「宮戸川（後半）」「野ざらし」「粗忽長屋」「おかふい」「甲府い」「船徳」などに登場する。

『ひろがる言葉』四年下巻にも、「昔、江戸の浅草の観音様のうらの田んぼのまん中に、……」で始まる落語『ぞろぞろ』という教材がある。

この浅草が数多くの落語の舞台となっているのは、江戸草創期から庶民の信仰を集めた「金龍山浅草寺」があり、信仰の背景には庶民生活がある。この生活が「ネタ」となって、落語が生まれた。その基盤は、日々この町で働く多くの人々が、笑い、泣き、悲しみ、そして人生を謳歌した息づかいにある。そこに華を添えるのが四季折々の風物である。

浅草演芸ホール

浅草寺から「伝法院通り」を抜けると「すしや通り」にぶつかる。この角に浅草演芸ホールがある。昼夜二回興行で、落語をはじめ、奇術、漫才、俗曲などを午前十時半から開演している。ふと足を止めると、法被姿で呼び込みをするお兄さんの姿に昔懐かしい気分にさせられる。落語ブームを反映してか、毎日満員の盛況ぶりである。ちなみに年に一度、台東区内の小学六年生には、「落語教室」を無料で開いてくれている（希望する学校のみ）。

今でこそ落語定席は東京都内に四、五軒と少なくなったが、関東大震災後の大正十五（一九二六）年には東京十五区内に九五軒、十五区外に更に八十軒以上あったといわれている（講釈や浪曲の席も含む）。

太郎稲荷大明神

この演芸ホールを出て右へ百メートルほど行き、路地を入った右側に喫茶店「アロマ」がある。ここの店主、藤森甚一さんは、この界隈きっての落語通である。その彼に、「落語『ぞろぞろ』に出てくる『小さな古びたおいなりさん』はどこですか」と尋ねたところ、「『入谷二丁目』あたりにある『太郎稲荷』だ」ということなので、早速行ってみた。間口二メートル奥行き三十メートルくらいの小さな稲荷神社であったが、実在している（？）とはびっくりした。

参考文献
『落語百景』新人物往来社
山本進編『落語ハンドブック』三省堂